

## メステイソの吐息

喜多川雅人

年明けの香港の夜景は寒い。外気は摂氏で十度ぐらいに下がっているだろうか。夜霧も流れず澄んだ空気のなか、黒く波打つヴィクトリア・ハーバーの対岸の灯りが水面に冷たく光る。香港島の明るい高層ビル群の後ろには、これらを少しだけ見下ろすような黒いヴィクトリア・ピークが望める。

浅見二郎は、帰国を前に、大晦日から二泊三日で、カウルーン半島の突端に建つリージェントホテルに泊まっている。一四一四号室。ハーバーサイドのデラックススイーンである。別れの夜だ。部屋は、「イヨイヨ」とも読める。

正月二日の午前一時過ぎ、束の間の熟睡からふと目が覚めた二郎は、ベッドを抜け出し、額が窓につくほどのところに椅子を寄せて深く沈んだ。寝酒として愛用しているグランマルニエをお猪口ほどのグラスで舐めながら、海外駐在の二年間を走馬灯のように思い返していた。

時は一九八五年。二年続いた香港返還交渉が、年の瀬も押し迫った前年の十二月十九日に英中共同声明で決着、香港は一九九七年七月に主権が中国に移り、その特別行政区となることになった。

二郎は、一九八二年九月、サッチャーが訪中して鄧小平との中英交渉が始まってから間もなく、十二月の発令で国鉄からN航空に向、同社のアジア地区を統括する支配人付きとして二年間を香港で過ごした。

出向の狙いははっきりしていた。近い将来民営化される国鉄の新幹線技術の輸出先を探り、それとなく人脈を開拓することである。長い目でみれば、アジア全域が対象となるので、香港を拠点として各国に足を運び市場調査をするのが任務だが、当面の目玉は中国と台湾だ。同じ人材が両方をカバーするのはなにかと難しいから、二郎の担当は中国に限定された。鉄道インフラの輸出という大事業の扉を開こうというのだ。中国に太いパイプを持つ香港チャイニーズが頼りだ。その頃は思いもなかったが、二〇〇八年夏の北京オリンピックまで、その一部が実現した。

パイプの一人は、香港華僑の富豪・王さん。ヴィクトリア・ピークの中腹に豪邸を持っている。金融業、不動産業、海運業などを手

広く扱う著名な事業家である。日本の大手海運会社を通して、国鉄総裁と懇意になり日本にも度々訪れていた。夜の方もなかなかなので、接待された銀座のクラブで出会ったチイママの石田礼子を引き抜いて、同氏が出資するカウルーンの一流ナイトクラブのチイママにした。

これが当たって、今度は香港島のセントラル地区に日本人相手のクラブを開き、礼子をそのママとして座らせた。包み込むような目の動きで男性をするっと引き込む妖艶な熟女だ。馴染みのお客さんは王さんとの関係を知っているから、彼女にはちよっかいは出さないが、礼子はお客さんの好みに合ったホステスをつけるのが巧みなので人気があった。

王さんの筋で、その後中国との最大のパイプとなった徐さんと近づきになった。鄧小平とも直に話ができるという大物だ。物腰が柔らかい大人（タイジン）で、ワンチャイで大きな中国百貨店を経営するほか、新聞や雑誌も発行している。裏の顔がいろいろあって、中国の開放を見越して商売の布石を打つには格好の人物だった。

人脈開拓の手腕を買われて、二郎は帰国すると、企画部門の涉外畑を中心に順調に歩み、理事にまで上り詰めた。自分ではあまり気がつかないが廻りから見れば、穏やかで優しそうな容貌であるにもかかわらず、気がつかないうちに蹴落とされたりするというので、『お前のような奴を *Wolf in Sheep's Clothing* \* って言うのだよ』と、嫌味たっぷりに同期の仲間から言われたことも一度や二度ではなかった。戦略・戦術大好き人間なのである。

中国を担当した裏には、中国好きという背景があった。少年時代に『三国志』をいたく気に入って、中国の歴史に興味を抱いた。高校時代には漢詩を朗々と謡う漢文の教師に惚れ込んだ。そして選んだのが、外国語大学の中国語科だ。

\*羊の皮を身にまとったオオカミ。柔和なうわべと違って残忍な人。

妻の方の家庭の事情があつて単身赴任した二年間には、プライベートでもちよっかしたハプニングがあつた。三十五歳の「独り者」。夜の世界が華やかな香港だ。夜会も多い。馴染みの店は何店かできた。ほとんどは深入りしなかったものの、最後にはまったのが中規模のナイトクラブ『ドリーム』であつた。駐在もあと半年足らずで

終わりになる八月末のことである。

王さんの礼子がママをやっている日本人駐在員相手の店で、開店して間もない。大手企業の幹部社員ならなんとか自前で賄える程度の勘定で済む。礼子が上手にしきっているのでホステスの客扱いも総じてよろしい。早くも人気があつた。ホステスはチャイニーズとフリーピーノだが、それ以外の外国人もちらほらいて多彩だった。久し振りに王さんの邸宅に招かれた二郎は、その夜、彼の勧めでこの店に寄つた。セントラルのペダー・ストリート沿いにあるN社の事務所から坂を登って十分余りのところにある。飲茶で有名な『陸羽茶室』の裏手に当たる。それからは、とにかく毎週一度は自前で足を運んだ。礼子が最初に指名したブラジル人のメステイノを滅法気に入ってしまったのだ。

愛称はヴィヴィアン。勿論本名ではない。本名は *Sueli Aparecida de Oliveira*。ややこしい。De というのは、確かオランダ人の「：家の」という意味だが、狭いヨーロッパのことだ。ポルトガルにもそんな名前があるのかもしれない。

メステイノとは、十六世紀初めにポルトガル人がブラジルに入植してから地元のインディオと混ざった人種をいう。白人の男とインディオの女が混じつたのが「メステイノ」、白人の男と黒人の女が混じれば「ニムラート」というらしい。黒人の男とインディオの女の場合は「サンボ」。複雑だ。ブラジルはややこしい多人種国家なのである。

混血が増えている日本だって、今から五十年もすれば、「ジャポネーズ」とか「ジャパテイノ」という人種が溢れているかもしれない。

二十四才という。真つ白とは言えない肌だが、小柄で細身。濃い飴色の髪。物静かである。欲張らない。お喋りではない。二郎の好みにぴったりだったのだ。片言の英語と広東語で会話する。

クラブでは、閉店までのホステスの時間給さえ勘定に含めてもらえば、お客さんと同伴して早退することも認められている。この世界ではよくある例だ。あとはお客さんと彼女との成り行き次第である。お茶だけで別れる、別のバーで飲みなおす、食事する、ホテルや自宅で遊ぶ……、合意さえすればなんでもありだ。

カラオケ大好き人間の二郎は、ヴィヴィアンが、同じ背格好のもう一人のメステイノとデュエットで歌う『桃色吐息』（註）に惚れ込んでしまった。高橋真梨子の大ヒット曲で、その頃の演歌にし

ては珍しくエキゾティックな歌詞とメロディが受けて、当時、化けつつあった。二人とも歌い方がこなれていて巧い。姉妹というふれこみで、たしかに似ていないではないが、怪しいものだ。礼子に、チップを弾んで、ヴィヴィアンと同じ曲をデュエットさせてもらった。それが終ると、ほかのお客さんが歌う演歌で踊る。相性がわるくないようだ。潮時を見て早退を誘い、礼子の許可を得て、わが家に向った。

二郎のマンションは、香港島の中心・セントラルと繁華街のワンチャイを結ぶ山沿いのスタップスロードにある。王さんの家とも車で十分ほどで便利だ。十階建ての最上階だから、下方のビルを隔ててヴィクトリア・ハーバーが望める。明るい部屋は趣味ではないので、リビングは柔らかい間接照明にしてある。飲み直しの乾杯をしたあと、『桃色吐息』を今一度デュエットした。

「咲かせて咲かせて

桃色吐息

あなたに抱かれて

こぼれる華になる」

そのあとにはなりゆきに任せた。

「浅見さんは、やさしいけど、なんでも平気でやるみたいで怖いみたい……」と、たどたどしい英語で弱々しく呟いていたのが印象的だった。

「また会える？」「Yes」と交わした言葉を最後に、車代を渡して、タクシーでワンチャイに住むという彼女の家に帰した。それから今日まで週一度のペースで続いたのだ。

お店が休みの日には夕方からきて、ちよつとしたブラジル料理をつくってくれる家庭的なところもある。そういうときは気がゆるむのか、「浅見さんの子供がほしい」と呟き、いつもと違う激しさをみせて、二郎が戸惑うほどだった。帰国の予定日が迫るにつれて、情が移ってきて、泊まっていくこともあった。

走馬灯が一通り廻った頃、ふとした気配で振り向くと、タオルを巻いただけのヴィヴィアンが後ろで佇んでいた。目を醒ましたらしい。

ホテルの最上階にあるレストランの一番奥のテーブルでひっそりと別れの宴を持ったあとの一夜だ。二時間ほど前には、部屋で夜景を眺めながら、最後の『桃色吐息』をデュエットしたばかりだ。乱れた髪を直しながら、遠くを見てじつと動かない。決して大きくはないが形のよい胸が片方だけこぼれて見える。泣いている。「浅見さんの子供がいるの」と、呟いてお腹を指すではないか。

それから夜を徹して話し合った結果、二郎の意を汲んで、とにかくおろすことで決着した。それに必要なものは帰国後、ヴィヴィアの口座に十二分に振り込み、それからも少額ながら月ぎめの定額を送った。十年ほど経って、拙い英語の便りは途絶え、仕送りも終わった。その後の消息は分からないままだ。なにか変化があったのだろうか。

別れの朝は小雨でけぶっていた。ヴィヴィアンは、二郎が迎えに来たN社の支配人車に乗り込んで啓徳空港に向うのを、ホテルの玄関の柱に隠れるようにして悲しげに手を振っていた。いつまた会えるやら……。

「金色銀色 桃色吐息

きれいと言われる

時は短すぎて」

時は移って二〇一二年の年明け、正月生れの二郎は六十三歳になった。

「今春で現役から退いて、系列の財団でボランテイアします」という年賀状を二郎から受け取った学友の吉村から、新年会で、久しぶりに一杯やらないか、と携帯で誘われた。

吉村は外語大の同期で、ポルトガル語専攻だった。合唱部で一緒だった親友である。大手商社に入り、ポルトガル語圏の中南米に長年駐在したスペシャリストで、ブラジルにも何年かいた。

表参道にあるブラジル料理店に誘われた。チェーン店で肉が美味くて、ワインもよろしいという。値段がそこそこのものも有り難い。国道二四六の交差点にある地下鉄・表参道駅から神宮前に向って、櫛が両側に並ぶ大通りを坂の中ほどまで下がり、右に折れてすぐのところだ。

メニューの選択はその道に詳しい吉村に一任する。前菜の『ヴィナブレッチ』が美味だった。赤、白、黄色、緑の野菜を細かに刻んでドレッシングで混ぜた分量たっぷりのサラダである。メインの『シユラスゴ』は独特の豪華さが香る肉料理。目の前で切り、櫛にさして焙る。いずれも舌に合って大満足。チリの赤ワインも最高だった。

ほろ酔い気分で店を出ると、二人は、予め申し合わせたように目配せ。歌好きの二人だ。吉村から誘った。

「新大久保にちよつと面白いライブ・バーがあるけど、どうだろう？ ピアノでもつけてくれるけど、カラオケもある。横文字の歌が巧い常連が多いね。雰囲気は外国っぽくて、二郎も気に入るんじゃないかな」

「悪くないね、乗るよ」と、二郎。

「最近メステイソの若い歌い手が入ってね、若い女性。懐かしい歌もやってくれる。そういえばお前、香港のクラブでブラジル系のホステスと仲良くなったなんていつかほざいていたけど、またなにかしでかしたのじゃないのか。なにせ『Wolf in sheep's clothing』だからな……」

「知るか、そんなこと……」

長年の付き合いだからお互いの好みは充分わかっている。話は早い。タクシーを拾って向った。

新大久保のライブ・ハウスは二十人で丁度よい程度の広さで、大人っぽい落ち着いた雰囲気がかかった。韓国語やタイ語などが飛び交う狭い脇道が連なる中にある。異国情緒たっぷりだ。香港のワゴンチャイとかチムサッチョイにそっくりな猥雑さが五感を刺激する。ごちやごちやなのだ。懐かしい。

店の名前は『ドリーム・ミー』。なぜか胸がときめく名前だ。応接間風の四人掛けの深いソファがいくつか置いてあり、中央のフロアで少しは踊れるようだ。二メートル四方もない高さ十センチほどの舞台にマイクが二本置かれている。ヤマハのスタンドピアノが舞台脇にある。気分が乗るとマスターがジャズを弾くらしい。

金曜の夜の八時。その割にはお客さんはぼちぼちといったところだが、この店は夜が遅いという。二次会流れがたむろするのだろう。九時と十時にメステイソが歌う仕組みになっているらしい。

二人は久し振りに英語のカラオケで盛り上った。古いのばかりだが、客層はどうやら同じような世代の男女らしい。飲み放題、歌い

放題で六千円というからさもあらん。

最初に選んだのは、吉村が『What a Wonderful World』、二郎は『I just can't stop loving you』。

次第に椅子がうまり、次々に横文字で得意な曲を披露する。プロ並みのレベルが揃っている。決して同じ歌を選ばないのが嬉しかった。

九時になってカラオケは小休止。メステイソンが登場して一人だけのショーが始まった。挨拶する笑顔にはどことなく寂しげな影がある。小柄で細身。二十代の後半だろうか。歌が始まった。なんと『桃色吐息』だ。

短いショーが終ると、大きく手を叩いてポルトガル語でなにか口走った吉村の席にやってきた。マリアンヌという。芸名だろう。

聴けば、香港生まれで、母親は昨年五十一歳でこの世を去ったそう。香港から日本に渡って、銀座のクラブなどで働いていたらしい。車の事故だったという。

下から覗き込むような表情に一瞬どきっとする。似ているのだ。

夜霧が濃い香港を一人彷徨うような複雑な思いが二郎を包んだ。歌声が遠くから響いてきた。

「ふたりして夜にこぎ出すけれど

だれも愛の国をみたことがない

さびしいものはあなたの言葉

異国のひびきに似て

不思議

金色銀色 桃色吐息

きれいといわれる時は短すぎて」 (完)

(註) 『桃色吐息』：作詞・康珍化、作曲・佐藤隆